

がん患者さんにお薦めのワクチン

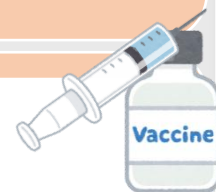
- がん治療は、病気自体や化学療法等の治療により感染症にかかりやすい状態になります。日頃からの感染予防に加えて、ワクチン接種をすることで感染症にかかるリスクや重症化の予防となります。

肺炎球菌ワクチン



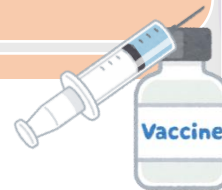
- ◆ 肺炎球菌は、肺炎、髄膜炎、血流感染症などの原因菌です。がん患者さんは肺炎球菌感染症にかかるリスクや重症化するリスクが高いため推奨されています。

带状疱疹ワクチン



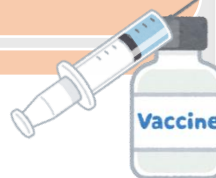
- ◆ がんの患者さんは、带状疱疹にかかるリスクが高く、かかった後も神経痛が継続する可能性があります。そのため、ワクチン接種が推奨されます。

RS ウイルスワクチン



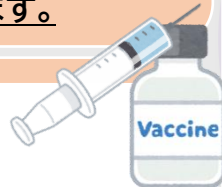
- ◆ 高齢者やがんの患者さん(特に血液がん)が RS ウイルス感染症にかかると肺炎など重症化することがあり、ワクチン接種による予防が推奨されます

季節性インフルエンザワクチン



- ◆ がん患者さんがインフルエンザに罹患した場合、重症化する可能性があります。
- ◆ 患者さんだけでなく同居のご家族も一緒にワクチンの接種が推奨されます。

新型コロナワクチン



- ◆ がん患者さん(特に高齢の方)は重症化リスクが高く、6-12 か月毎の追加接種が推奨されます。
- ◆ コロナワクチンを接種しても、コロナにかかったときは抗ウイルス薬をお勧めします。

ワクチン接種の対象となる方や各ワクチンの詳細は、次頁をご参照ください。
ワクチン接種をご希望の患者さんは、診察時に医師にご相談ください。

1, 接種をお薦めするワクチン

○肺炎球菌ワクチン 薬剤名:ニューモバックス®、プレベナー20®、バクニューバンス® キャップバックス®※キャップバックスは今後発売予定

肺炎球菌は、がん患者さんがかかる肺炎の原因となる代表的な細菌の1つです。肺炎以外にも、侵襲性肺炎球菌感染症とよばれる髄膜炎や血流感染症(血液中に肺炎球菌が入り、全身を回る病態)などの、より重篤な感染症を引き起こします。がん患者さんはこの侵襲性肺炎球菌感染症に罹患するリスクが高くなるため、予防が重要です。定期接種ではニューモバックス®が使われていますが、キャップバックス®、プレベナー20®、バクニューバンス®もお勧めします。キャップバックス®、プレベナー20®、バクニューバンス®は免疫をつける力が高い特徴があります。バクニューバンス®を使用する場合は、ニューモバックス®と組み合わせて接種すると効果が高まります。プレベナー20®やキャップバックス®は幅広くカバーでき、単独でも十分とされています。

※2025年8月現在、キャップバックス®はまだ流通していません

○带状疱疹ワクチン 薬剤名:シングリックス®、乾燥弱毒生水痘ワクチン「ビケン」®

水痘(みずぼうそう)や带状疱疹(たいじょうほうしん)の原因になるウイルスは初めて感染すると水痘になります。その後、ウイルスは背中の中の一部(後根神経節)にひそんで残ります。そして、疲れやストレス、免疫力が落ちたときに、このウイルスが再び活動を始めて出ると、带状疱疹になります。

带状疱疹になると、強い痛みが出ることが多く、一部の人では痛みが何ヶ月も残ることがあります。また、脳卒中や心筋梗塞のリスクが高くなることもわかっています。特にがんの治療を受けている方は、带状疱疹になるリスクが高いため、予防がとても大切です。

シングリックス®は、2~6ヶ月の間隔で筋肉内に2回接種 予防効果:80~90%前後

乾燥弱毒生水痘ワクチン「ビケン」は、1回の接種 予防効果 60%前後

生水痘ワクチン「ビケン」は、生ワクチンのため免疫が低下している方への接種はできません。

(がん患者さんによっては、使用できない場合があります。)



○RSウイルスワクチン 薬剤名:アレックスビー®、アブリスボ®等

がん患者さん(特に血液がん患者さん)は、健常者に比べてRSウイルス感染症による肺炎などの重症化リスクが高いため、予防接種が推奨されます。

○季節性インフルエンザワクチン

インフルエンザワクチンは、発症や重症化予防を防ぐ効果があります。がん患者さんはインフルエンザに罹患した場合に重症化するリスクが高いためワクチン接種が推奨されます。(鼻から吸入する生ワクチンは避けることが推奨されます。)効果は年ごとに変動するため、毎年流行前の接種が望ましく、患者さんを守るため周囲の家族も接種が推奨されます。

2025年度より、高齢者を主な対象に、抗原量が多く効果が高いとされるインフルエンザワクチン「エフルエルダ®」も接種できるようになる見込みです。

○新型コロナワクチン 薬剤名:コミナティ®、スパイクバックス®等

がん患者さん(特に血液がん患者さん)は健常人と比較するとワクチンの効果が弱いことが知られていますが、重症化予防や後遺症のリスク低減などの効果が示されています。6-12 か月毎の追加接種をすることで重症化予防となるため、定期的な接種が推奨されます。がん患者さんと健康な方と比較しても副反応の増加は見られていません。ワクチン接種後でも、新型コロナウイルス感染症に感染した場合は、速やかに医療機関を受診し、さらなる重症化予防目的に抗ウイルス薬の治療を受けることが推奨されます。

2, ワクチン接種費用の補助について

お住まいの自治体によっては、市区町村からワクチン接種費用補助がある地域があります。費用補助を受ける場合には接種できる機関が指定されている場合があります。詳しくはお住まいの自治体のホームページや自治体の窓口等にご確認ください。

- お近くの医療機関でワクチンを接種する際に、がん治療の主治医が推奨していることを分かりやすくする欄を準備しました。診察時にがん治療の主治医にお見せし、ワクチン接種について伺いましょう。
- ワクチン接種を推奨いただいた場合は、その推奨を記載いただくことで“主治医の先生からどのワクチン接種推奨いただいたか”を忘れることなく、お近くの医療機関スタッフやご家族に伝えることができます。

<<がん治療の主治医の先生へ>> ※推奨時には、以下の欄をご活用ください。

患者さんのお名前: _____ 様に

☐ 肺炎球菌ワクチン(ニューモバックス®、プレベナー20®、バクニューバンス®)

☐ 带状疱疹ワクチン(シングリックス®)

☐ 带状疱疹ワクチン(乾燥弱毒生水痘ワクチン「ビケン」®)

☐ RS ウイルスワクチン

☐ 季節性インフルエンザワクチン(不活化)

☐ 新型コロナワクチン

☐ その他(_____)

注意！生ワクチンは化学療法中などで免疫が低下している方には接種できません

のワクチン接種をお勧めします。(欄にチェック)

_____ 年 _____ 月 _____ 日

_____ 病院 医師 _____

3. 接種時期

ワクチン接種を希望の場合は、診察時に主治医に相談しましょう。



○肺炎球菌ワクチン・带状疱疹ワクチン

- がん薬物療法による治療の場合は、「治療の 2～4 週間以上前」もしくは「治療の 3～6 ヶ月後」が目安とされています。＊生ワクチン以外は主治医の判断次第で治療後間もない時期でも接種が可能ですので医師にご相談ください。
- 手術や放射線によるがん治療の場合は、接種時期は主治医にご相談ください。

※日本臨床腫瘍学会、発熱性好中球減少症(FN)診療ガイドライン改定 3 版、米国感染症学会、IDSA 2013 Guideline for Vaccination of the Immunocompromised Host.

○インフルエンザワクチン・新型コロナワクチン

- 接種時期は主治医にご相談ください。
基本的に上記「肺炎球菌ワクチン・带状疱疹ワクチン」と同様ですが、治療中でも接種可能なことがあります。
- 毎年の流行シーズンになるまでに接種を済ませておくことが望めます。

4. ワクチンに関するよくあるご質問



Q : ワクチンには生きた病原体が入っているのですか？

A : ニューモバックス[®], キャップバックス[®], プレベナー20[®], シングリックス[®], インフルエンザワクチン, 新型コロナワクチンには生きた微生物は入っていないので、ワクチンによってこれらのウイルスに感染することはありません。当院ワクチン外来では取り扱っていない”乾燥弱毒生水痘ワクチン”は生きたウイルスが入っているため、高度の免疫不全の場合は接種できません。

Q : どのような副反応が起こりますか？

A : ワクチンの種類にもよりますが、接種部位の発赤、筋肉痛などの局所症状のほか、発熱など全身性の反応が見られる場合もあります。詳しくは接種時に医師にご確認ください。接種から 1-3 日以内に症状は改善することが多いですが、もし副反応の症状が特に重かったり長期間持続するような場合は、接種した医療機関もしくは近くの病院への受診や相談をご検討ください。

